

『<楽園>の死と再生—野呂有子教授還暦記念論文集』の出版に寄せて

英文学科教授 野呂有子

日本大学文理学部英文学科の一員となつてから、同僚の先生方、助手、副手、そして日本大学英文学会会員の方々には本当にお世話になりました。また、多くの学生の皆さんと出会い、ご一緒に勉強する機会を与えられました。この場を借りてお礼を申し上げます。

本論集に、論文をお寄せくださった方々の中には、関谷武史先生から引き継いで野呂が指導させていただいた方もいます。また、原公章先生が指導教授となり、野呂が補佐をさせていただいた方もいます。當麻一太郎先生門下の方もいます。野呂の元で主に **Milton** を専攻してこられた方います。その他、ご縁があつて論文執筆に参加して下さった方もいます。この多様性が本論集の特徴だと考えております。

野呂の還暦の頃に、ご縁のある方々とともに何かまとまったものを作成しようという声があつた頃から起こったものか判然としませんが、結局、出版までには二年余を費やしました。若い方々に研究成果を発表する場を提供することができれば、これに優るよろこびはありません。さらに、野呂の恩師、新井明先生にお願いして、先生の数あるご論考の中から、『楽園喪失』と離婚論—楽園脱出の原理』を掲載させていただくことができました。

掲載順序は、始めに新井明先生、最後に野呂を置く、という形をとりました。後は、原則として論文で中心的に扱われる文学作品及び絵画等の出版・作成年代順としました。全部で 20 本の論文が出そろい、それぞれの扱う範囲も多岐に亘るため、配列には最後まで苦慮したことも確かです。執筆者名と論文タイトルを以下に示します。(敬称略)

新井明 『楽園喪失』と離婚論—楽園脱出の原理—

小川佳奈 トマス・マロリーの『アーサー王の死』における聖杯の役割及びその主題との関わり

亦部美希 “Machiavellian Hero”の生成—Henry V と Edgar—

藤木智子 『冬物語』の自然—エコクリティシズムの観点から

桶田由衣 *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634*における “chastity” と “charity” —*Christian Doctrine* における 定義から—

上滝圭介 『楽園の喪失』における “gate / gates”—ミルトンの空間設計—

野村宗央 A Study of *Paradise Lost*—the Relationship between “evil” and “pain”

山田恵摩 Milton と戦闘—*History of Britain Book II* を中心にして—

堀切大史 トランスアトランティック・エデン—コール、ミルトン、ロマンティシズム—

山本由布子 対立する価値観がもたらすエネルギー—エミリ・ブロンテの思想—

大濱えり Miltonic Twain—『ハドレーバーグを墮落させた男』におけるミルトン的人間観—

前島洋平 *Up at the Villa* (1941) の再評価の可能性—映画『真夜中の銃声』(2000)との比較をとおして—

茂木健幸 トニ・モリスンの描く楽園—『パラダイス』に描かれた楽園について—

加藤遼子 *The Secret Garden* に描かれた二人の Eve—*Paradise Lost* からの影響を踏まえつつ—

伊藤佐智子 *Paradise Lost* と Space Trilogy—‘The Inner Ring’の観点から—

金子千香 *Paradise Lost* から *Harry Potter and the Chamber of Secrets* へ—Books of Knowledge of Good and Evil を見分けるために—

足立綾子 庭と女—西欧、中国、そして日本—

山田順子 明治日本におけるジョン・ミルトン像の変遷—蘇峰・独歩の受容を視座として—

恩田佳代子 新渡戸稲造からミルトンへ—カーライルを通してわかること—

野呂有子 *Jane Eyre* における「楽園」脱出の原理

各論文を通して全体を俯瞰したときに、意外な作家の意外な作品中に『楽園の喪失』のテーマやイメージが影を落としていることに気が付きました。英米の文学作品、絵画、そして日本の思想家や文学作品に John Milton(1608-1674) がいかに大きな影響を与えているかを改めて認識することになりました。これは大きな収穫となりました。

本論集を纏めるにあたり、編集委員会を立ち上げました。メンバーは、前島洋平(日本大学文理学部准教授)、上滝圭介(文理学部講師)、野村宗央(助手)、そして野呂でした。委員会において寄せられた論文の査読を行い、掲載の可否を判断しました。それ以外にも、表記の統一を始めとして多くの事務作業をしていただきました。この場を借りて他の委員の方々にお礼を申し上げます。

本論集タイトル「<楽園>の死と再生」は、野呂が提案し、編集委員会の了承を得て決定しました。それでは、ここで言う<楽園>とは何でしょうか？それは、人の心の拠り所であり、心のふるさとであると考えられます。人はそこで生を受け、そこで「育み手」に慈しまれ、愛を注がれ、成長していきます。やがて、多く人は喪失体験を経て、あるいは追放されて、<楽園>から旅立っていかねばなりません。

やがて人は<楽園>を再発見したと感ずるかもしれません。あるいはそこに自分の手で<楽園>を再創造しようとするかもしれません。けれども、その<楽園>は自分が求めていたのとは異なると、ある日、突然気づくかもしれません。

ん。それどころか、実はそこが＜地獄＞だったと悟るかもしれません。そのよ
うなとき、人はどうするでしょうか？

ミルトンや本論集で扱われる作家たちが示唆するのは、「＜楽園＞はあなたの
心の中に育てることができる。心の中に＜楽園＞を回復すれば良い」というこ
とではないでしょうか。自分自身の心の中に＜楽園＞を創出すれば、もはや＜
楽園喪失＞を嘆き、＜楽園回帰＞のために流浪する必要はないからです。であ
ればこそ、ミルトンのイヴは楽園を追放されるとき、アダムに向かって「あな
たとともにいれば、どのような荒野であっても、そここそが楽園なのだ」と語
ります。

しかし、心の中の＜楽園＞であっても、それが＜楽園＞であり続けるため
には、人はそこで安逸と惰眠を貪っておいでになりますことは許されません。不
可視の＜楽園＞であっても、そこには絶えず人の手が入り、人が目配りする必
要があるのです。それこそ、＜楽園＞が草花や樹木の生い茂る場所として象徴
的に描かれている理由です。手を入れずにいれば、やがては雑草や茨が、百合
や薔薇を覆いつくし、枯らしてしまうかもしれません。そこは雑草の生い茂る
荒地となり、サタンが「蛇」の姿を借りて忍び込んでくるかもしれません。で
すから、わたしたちは常に心の中の＜楽園＞を守り育てていかなければなりま
せん。

ミルトンは＜楽園＞を外面的なものと同面的なものの双方向で捉えました。
内面的に考えた場合、楽園は神と人間個人との信頼関係そのものを象徴してい
ます。信頼関係が失われたとき、楽園も失われるからです。外面的に考えた場
合、楽園は人間と人間の絆を構築するものとして理解されます。人間の輪が広
がっていけば、それはやがては理想の共同体として理解されることになるでし
ょう。これらは目には見えないが、確かに存在する＜楽園＞なのです。

そうすると、日本大学英文学会も一つの学的共同体、すなわち、＜楽園＞の
具現化として見るのが可能となるのではないのでしょうか。そうであることを
祈念しつつ、本書を＜楽園＞に咲いた花として、実った果実として、皆さまに
ご披露したいと祈念しています。文理学部図書館と英文学科図書室に 1 冊ずつ
寄贈致しましたので興味のある方は是非、ご一読ください。

最後に、本論集について、紹介させていただく場を与えて下さった日本大学
英文学会の皆さまに、執筆者を代表してお礼を申し上げます。